

## 2006 年 西アフリカ・ニジェールの旅

世界 189 ヶ国のなかで、189 番目の最貧国

大野 正夫

ニジェールは、アフリカ西部にある内陸国で、国土の多くはサハラ砂漠で、そのほかにはサヘル地域という草原と低木の乾燥地帯である。面積は日本の 3.3 倍で人口は2,244万人(世銀)である。世界で最も暑い国の一つで、1 年のうち 4〜5 月は連日 40 度を超す。



### ニジェールの位置図

### サハラ砂漠とサヘル地帯

第二次世界大戦前は、フランス領であったので、現在も公用語はフランス語である。ウランの埋蔵量は世界 4 位と言われて、外貨収入の多くはウランの輸出であった。国連の統計で、一人当たりの 1 日の生活費は 200 円程度で 189か国のなかで 189番である。しかし、生活面を含めた貧困度は世界の下から 7 位となっている。これは地球変動で砂漠化が進み、農産業や牧畜の生産が減少している事と人口の増加である。出産率は世界 3 位である。

2010 年以後に、イスラム武装集団との戦いが始まるまでは、アメリカやヨーロッパ諸国、特にドイツとフランスの援助が多かった。貧困であるが、アフリカのなかでは比較的安全な国とされていて、サハラ砂漠の観光客が多く訪れていた。



### かつてのサハラ砂漠とラクダに乗ったツアー

2000 年に入って、中国の有償支援で競技場、道路の整備などが行われて、在住中国人が多くなり、日本人がタクシーに乗ると、「ニイハオ」と言われることが多くなった。2010 年以後、社会主義勢力が議会の実権を握り、中国やロシアの援助が多くなった。

2023 年 7 月のクーデターは 親衛隊・隊長が起こしたがロシアの影響があると噂されている。米国人、フランス人、日本人は国外脱出し、援助協力はニジェールから撤退した。今は、ソ連、中国が援助を行っているが、イスラム教武力集団とニジェール国軍の抗争が続いており、危険国家となっている。日本政府は危険レベル3として、民間人の入国を禁止している。中国政府は原油パイプ敷設支援をして原油輸出が始まったが、クーデター以降の事情は不明である。

## JICA海外青年協力隊の活動視察の家族の旅

筆者の長男・岳夫が30歳の時、2004年から2年間、JICA海外青年協力隊隊員として、ニジェールに着任した。隊員滞在中に、(社)JICA海外青年協力隊を育てる会が、「家族視察の旅」の企画があったので、その団体旅行に参加した。2006年2月6日に成田発、パリー経由ニジェール着、2月16日帰国の旅であった。添乗員が全行程をサポートするので、楽しい団体旅行となった。

参加者は14名で、多くは両親カップルが多かった。首都・ニアメは、西アフリカ諸国を流れる大河・ニジェール川が円形に曲がった中の草原にある。JICA青年協力隊の派遣隊員は60名で、当時はアフリカ地域では多く派遣されている国であった。

ニジェールには大使館はなく、JICA事務所はかなり大きな建物であった。協力隊隊員集合施設を兼ねていた。ニジェールの地方に着任した隊員が一時帰ってくる宿泊施設で、男女別の二段ベッド部屋が2部屋あり、炊事、バスルーム、トイレも完備していた。ネットシステムも整っており60人の会議ができる大部屋があった。当時、日本政府はJICA海外青年協力隊によるニジェール支援事業を進めていたが、一方JICA専門家の派遣が少なかった。日本政府はインフラ整備に積極的でないようであった。

派遣されている若い協力隊員は、教育、公衆衛生、生活環境の分野が多く、教員、看護師の隊員が多かった。女性隊員が多くて男性隊員は10名もいなかった。

### 大学でコンピューター指導

岳夫は大学院を出て、(株)NEC(日本電気)研究所の研究員であった。海外進出の大手企業は、JICAと在職のままで、JICA専門家や協力隊隊員に派遣する契約が結ばれていた。岳夫はソフトシステムが専門であったので、パソコンの修理研修ため事前研修を3か月受けてNEC(株)在職で、30歳の時にニジェールに着任した。

配属先は鉱工業地質技術大学であった。首都ニアメ中心部から橋を渡ったニジェール川対岸のハローバンダ地区に、広大な20万m<sup>2</sup>の敷地に2万m<sup>2</sup>の施設があった。1990年に西アフリカ経済共同体 Communauté Economique l'Afrique de l'Ouest (CEAO)の基金で、加盟する諸国の工業分野の技術者養成大学として開校した。その後1995年にニジェール政府に譲渡され、現在はエネルギー鉱山省の管轄になっていた。学科は情報工学科、機械工学科、電気工学科、地質工学科、鉱物環境科の5つで、組織としてはこのほかに一般教養科があり、学生数は各学年約200名であった。日本語訳では「大学」となるが、実際は技術者養成のための高等専門学校で、研究活動はしていなかった。学生は、全員、敷地内にある学生寮に宿泊していた。



教室への通路は日よけ屋根付    2年間活動を行った情報工学科の授業風景

彼の任務の資格は講師であり、フランス語で2年間の授業と実習を、エアコン付きの3室の部屋で、コンピュータが置かれた部屋で行っていた。情報工学科は2001年に発足し、他の学科より教室はきれいではあった。ただ、二人に一台くらいしかパソコンの台数がなかった。しかも動かないものが多かった。パソコン内に細かい砂が入っていたので、任務中に大学の全部のパソコンを動かようにしたそうだ。



パソコンの個別指導



JICA事務所

2005年7月から帰国までの間に、JICA事務所内にWiFiを整備し、大学内LANを整備をした。LAN整備は、裸のRJ45ケーブル(ネット用の細いケーブル)だけで、炎天下になる屋外の通路の天井を何10mも結んだり、ホース一本のカバーだけで建物と建物の間の地面を潜ったりと、かなり低コストで配線をした。そのためニジェールの暑い環境で、どれだけの期間持つか心配であった。万が一、ケーブルが断線しても、ケーブルを100m(数1,000円)買い直すだけで、大学スタッフ自身で再配線できるようにトレーニングしてきた。援助プロジェクトにありがちな、『修理費用が出せなくて整備したLANが使われなくなる』ということは起きないはずある。20年たった現在も学内LANが作動しているそうだ。



市内の流れるニジェール川



ニジェールの住宅街

ニアメ市街からニジェール川を渡った対岸の大学キャンパス内の教員用宿舎の一部屋で2年間すごした。エアコン付きのかなり広い部屋で、台所、居間とベッドにトイレ、バスルーム、クローズ庫がサイドにあった。生活には便利な配置であった。毎日、自炊であったが、多くの協力隊員が経



験する、夜の猛暑経験がなくすんだ。学生寮はエアコンがなく、夜は外で寝ている学生が多かった。

筆者の滞在中は、教員用宿舍が用意されていたが断り、自分はベッド、岳夫が床にマットを敷いて、共同合宿生活であった。岳夫の日常生活を垣間見る良い機会であった。

我々が滞在中は大学の授業はなかったが、岳夫は、別のところあるITの実務専門学校の授業も担当していた。そこは大学キャンパスから、少し離れた街のなかにありタクシーで行った。この学校の教室には、エアコンがなかった。60分授業だと思うが、授業は予定通り行われた。室内の猛暑は、外来者には辛かった。外に出ると、さらに熱い。部屋の奥にマットが積み積み重ねてあり、床からの暑さは、若干やわらぐので、マットに横になって授業を聞いた。30分を過ぎた頃か、校長先生が教室を見に来て、「お父さんが疲れているので、帰っては！」と、言われたようで、早々に学校を出た。

コンクリートの部屋は暑い。エアコンがないと熱気がこもる。生徒も教師も、この猛暑のなかで、平気な顔をしていた。人間は環境に強い適応力があることを知った。受講する若者達は、まっすぐに先生を見ており、技術者となる意気込みを感じた。

岳夫から、赴任中に下記の「ニジェール活動日記」は、2か月の一回くらい届いた。駒ガ根訓練所から始まり、帰国までの日誌であった。帰国後にまとめて、ウェブサイトに掲載している。ニジェール赴任の多くのJICA協力隊隊員の行動がよくわかる。また当時のニジェールの人々の生活や祭事を書かれている。街中の状況、アフリカ料理案内、観光、海外旅行の準備なども書かれている。協力隊の生活、アフリカ事情も良くわかる。ぜひ、下記のサイトをみてください。

## 青年海外協力隊 ニジェール活動日記とその後

<http://takememo.net/niger/>

## 家族研修の旅、報告とアルバム

60人の協力隊員のなか、半数ほどはニアメ市外の地方での活動をしており、市内で活動している隊員は少数であった。我々は数名の協力隊員の活動を視察した。地方に派遣されている隊員の家族は、翌朝から、それぞれの隊員の赴任に向かった。市内在住隊員の家族は市内見物を共にした。



露店が並んでいる。



中心街の大通りに、大きな二つの給水塔

市内に入る大通りは、歩道が車道より広くて新鮮に感じた。のんびりとした光景は、東南アジア諸国と違い、アフリカ大地の街であった。道を歩く男女の服装も、小ざれいであり、ここでは貧困を感じなかった。首都と地方の格差があるのであろうか。



市場のなかには、野菜、淡水魚、卵など豊富に並び、レジ機を使うスーパーもあった

## 郊外の部落訪問



村民の家の前での記念写真。子供が多いのにびっくり、後列の左から 2 人目が協力隊員

郊外にある部落を訪問した。

この村民の生活改善を指導する協力隊員は、飲み水は沸かし、十分に注意をしたが、赴任してすぐに下痢をして入院したという。

しかし、この部落で、住民と同じ生活をしていた。赴任 2 年の終わりごろになると、だんだんと身体が環境に会ってゆくのがわかったそうである。

ニジェールの大きな問題は早婚であり、15 歳を過ぎると子供ができるそう。多産であるが、5 歳以下の幼児死亡率も高い。学校に通う子供は 3 割くらいと書かれていた。まず子供時代からの就学率を高める施策が必要であろう。

この部落で、おばさんが、通訳であるが「この部落はきれいだろう」と我々に言った。これは、協力隊員が、率先して清掃し、「きれいにすることは良いことだ」と、部落民が知った。彼の 2 年間の成果である。

ニアメの街には、子供の物乞いが多い。彼らは学校に行っていないであろう。フィリピンの首都マニラでは 1980 年代、物乞いが自動車が走るところに多くいた。しかしだんだんと、その数は減っていった。2000 年代には、物乞いは皆無となった。物乞いは、国の施策、町の施策の目安になる。



## 郊外の砂丘に立つ



下段に示すテネレ砂漠は首都ニアメから、さほど遠くはないが、後方に山脈があり、西アフリカで最も美しい砂丘地帯である。年間雨量が25mm以下で、ニジェール北東からチャド西部に広がる40万平方キロメートルを超える広大な砂丘で、末端が首都の近くまで続いている。

我々は、末端の砂丘を踏破した。

砂丘の下方はさらさらとして、脛まで深い。砂丘の頂上は固くなっており記念撮影をした。

中段の写真は砂丘の末端で、低い樹木があるサヘリ地域の境界である。

我々の立っているところが、砂丘の麓で、ここから町までサヘリ平原となる。麓からニアメの街に近づくに連れて、大きな樹木がだんだんと多くなっていった。ニジェール川からの水が地面を潤しているのであろう

## 野生キリンがいるニジェール国立野生公園



首都ニアメから60km程のクレには、世界に数百頭になってしまった珍しいジラフ、カメロパルダリス、ペラルタをはじめ、数種類の野生のキリンに出会える国立野生公園である。

ニジェールでは、キリンを神のように崇めており、岩面にはキリンがよく描かれているとネットに書かれていた。

### キリンの群れ と 大木前に立つ

体育担当の女性隊員の両親と5人で、キリン探しに出かけた。乾燥した大地に、灌木が茂り、大きな樹木がボツボツとあるところに野生のキリン達がいた。キリンに遭遇できるのは、時の運と言われたが、到着すると、すぐにキリンの群れに遭遇した。キリンは群れで行動するようだ。

キリン達のまじかに大きな木の上方の葉を食べている光景を観察できた。その近くに、巨大な大木があった。乾燥地帯であり、台風などの強風もないので、単独で育ったのだろうが、樹齢は何年だろう。

### アリ塚を見る



キリン達がいる森から、少し離れたところに広い砂地があり、そこにいくつかのアリ塚があった。アリ塚の事は、少し知識はあったが、背丈より高く、硬い岩石のようであった。

アリ塚と左はシロアリの効果が見られるニアメ市外の野菜畑。



ネットで検索すると、シロアリの専門家である Lee and Wood は『Termites and Soils』(1971 年)のなかで、こう書いている。「アフリカの乾燥地で地上を支配しているのは人類かもしれないが、地下を支配しているのは確実にシロアリだ」と。太陽光や乾燥、高温に弱く、外敵の多いシロアリが地下の世界を支配している。シロアリは女王アリを頂点として、働きアリ、兵隊アリと階層分化してるが、いまだ謎に包まれた生き物である。

ニジェールの乾燥地において、弱い生物が地下の世界を支配し続けているというのには、それなりの合理的な理由があるはずであると結んでいた。

興味を持って、シロアリの検索を進めると{飢え争いをなくす 砂漠をゴミ緑化する。アフリカの人道危機を解決実践学」京都大学教授 大山 修 2024 年放映の記事があった。京都大学の研究チームは、砂漠の緑化と、野菜作りの試験をしていた。

乾燥地帯のアリ塚がある郊外の土地に、フェンスで囲って、町から運んできた家庭ゴミを撒き、上から砂をかぶせる。ゴミは分解されて養分となり、ゴミの中に含まれている様々な植物の種子も発芽する。雨季になると、みるみるうちに植物が生い茂ってきた。砂漠に生息するシロアリの住处、アリ塚も緑化に重要な役割を演じているであろう。

シロアリの作る蟻塚から半径 250m~300m 以内にゴミを撒くと、シロアリはそれらをエサにするために地中を掘ってゴミに辿り着き、その過程でコンクリートのようになくなった土壌が地中から耕されていく。緑化した場所では、牛やヤギなどの家畜がゴミから育った植物をエサとして育ち、糞尿は肥料となって土壌を豊かにした。このような試験がニジェールで行われた。ぜひ、この事業を大きくしてほしい。

## カバを見るため、小舟でニジェールを走る



ニジェール川は市内の川幅は狭いが、郊外に出ると、想定外に広い川になっていた。カバが生息しているところには、エンジン付きの小舟が待機していた。カバは、川岸の茂みに顔を出すそうで、居そうなところを走った。川面が揺れて、目のようなものを確認して、カバ探しは終わった。

ネットによると、ニジェール川のカバ見物は観光の一つであるが、服がカバの口にかかり水中に引き込まれ、死亡したこともあるそうだ。

ニジェールの旅を終えて感じたことは、ウラン鉱山資源に頼る政策は、相手国との関係で危うさがある。ニジェールでは、働く場を作ること、雇用が大きな課題である。京都大学の先生方が試験をされた低木な草原で、アリ塚があるようなところで、農業と牧畜を起こすことは、それほど難しい事業ではない。野生動物が多く、砂丘もある。観光産業はヨーロッパに近くて適している。

### 帰国した協力隊員

2004 年度のJICA海外青年協力隊員の中から、東京在住の隊員 8 名が、首相官邸で、福田康夫首相、緒方貞子JICA総裁と帰国報告を行った。



首相官邸に 2004 年度JICA海外青年協力隊員帰国報告(東京在住隊員)  
中央は福田康夫首相、緒方貞子JICA総裁、右側は岳夫

### 2025 年のニジェール情報

2018/2019 年の人間開発報告書(UNDP)で、人間開発指数が 189 ヶ国中 189 位と経済、教育、保健等どれをとっても状況の厳しい国である。人口増加率は 3.8%(世銀 2018)、乳幼児死亡率は 1,000 人中 48.3 人(HDR 2019)、妊産婦死亡率は 10 万人中 553 人(WHO 2015)と世界の中でも最も高い水準である。

また、農民が国民の 80%を占めているにも関わらず、耕作可能地は国土の 10%足らずであり、また短い雨季の不規則な降雨パターンと水食や風食、人間活動による土地の荒廃が、食糧生産の安定化をさらに困難なものにし、慢性的な食糧不足に悩まされている。

このように、社会・経済的、自然・気候条件的にも厳しい環境ではあるが、一方で、実際に接するニジェールの人々は穏やかで親しみやすく、国民の多くが敬虔なイスラム教徒で、毎日 5 回のお祈りを欠かさず、イスラム教にまつわるラマダン(断食)やタバ

スキ(犠牲祭)といった行事は全国的に盛大に行われている。

長く、一般的な治安は、ほかのアフリカの国々と比較すると良いと言われ続けてきた。残念なことに、近年のマリ、リビア、ナイジェリアといった周辺国の急激な治安の悪化、情勢不安と同時発生のように、2023 年 7 月にクーデターが起こり、ニジェールの平穏な生活が脅かされ、ロシアの影響の強い国軍とイスラム武装集団との衝突が頻発して、危険国家とされてるのは残念である。西欧諸国、民主主義国が撤退すると、このような国になるという事例をニジェールが示している。世界が混迷する時代が終わることに、日本政府は行動を起こさねばならない。